

広島市立大学学術リポジトリ

Career Choices of Chinese International Students after Graduation : Exploring Their Decision-making Processes and Factors That Influence Them

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-01-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重田, 美咲, 山本, 晋也, SHIGETA, Misaki, YAMAMOTO, Shinya メールアドレス: 所属:
URL	https://hiroshima-cu.repo.nii.ac.jp/records/11

中国出身の学部留学生の進路選択 選択の経緯と要因に着目して

重田 美咲・山本 晋也

Career Choices of Chinese International Students after Graduation - Exploring Their Decision-making Processes and Factors That Influence Them -

Misaki SHIGETA and Shinya YAMAMOTO

Recently, international students finding jobs in Japan after graduation have slightly increased. However, most of the research about career choice is in the form of quantitative surveys, so it is difficult to grasp changes along the time axis and to see the factors that led to their career choices. In this study, eight international students from China who had studied at the same university and department in Japan at the same time participated in interviews aimed at elucidating their career choices. From these interviews, it was found that prospects of future life events; the influence of relatives, acquaintances, and friends; work experience such as part-time work or internships; and various incidental factors impacted job hunting and career choices. In addition, it was suggested that there are not only students who decide to return to their home countries while struggling to find a job, but also students who switch from working in Japan to returning to their home country, before job hunting begins. The research also found that they had difficulty gathering information about jobs after studying abroad for an extended period of time, etc. We hope that the results of the research will be utilized to support and educate international students.

- I. はじめに
- II. 先行研究と課題
- III. 調査・分析方法
- IV. 留学生の進路選択をめぐるキャリア・ストーリー

- V. 進路選択の経緯の比較・分析
- VI. 進路選択に影響を及ぼした要因の比較・分析
- VII. まとめ

I. はじめに

日本政府は、日本経済再生本部（2016：207-208）や対日直接投資推進会議決定（2016：12-14）で留学生の就職支援強化を打ち出し、留学生の日本での就職を5割まで引き上げることを目指してきた。日本学生支援機構（2021a：1）によると、2019年度の学部留学生の進路で最も多いのは、日本で就職した学生で5,150人（42.0%）であった。大学院生や専修学校生（専門課程）に比べれば就職した学生の割合は高いのだが、5割には届

いていない。一方で、日本学生支援機構（2019：48、2021b：52）によると、パンデミック前の2018年1月の調査で「学部正規生」の70.5%が卒業後の進路として日本での就職を希望しており、コロナウィルスが拡大し始めた2020年1月から2月の調査でも、61.4%が日本での就職を希望していることから、日本での就職を希望しているにもかかわらず、日本で就職できない学生が一定数いることが推測できる。また、日本学生支援機構（2021a：1）によると、学部留学生の進路で「就職・日本国内」5,005人（42.0%）に次いで多いのは、「その他・出身国」2,343人（19.3%）で

あり、進路が決定していない状態で帰国する留学生も多いことがわかる。

重田（2021）では日本での就職活動をテーマにした留学生用日本語科目を2年次配当で展開しているが、受講生の殆どがその時点では日本での就職を希望しているものの、全ての受講生が最終的に日本で就職しているわけではなく、なぜそのような結果に至るのか常々疑問に思っていた。

日本政府や日本社会が留学生の日本での就職に期待するのであれば、卒業後、日本で就職しなかった留学生の経緯や理由を明らかにする必要がある。大学においても、留学生の進路指導、キャリア支援を行っていく義務があり、そのためには、なぜ日本で就職できなかったのか、何が要因となって進路変更がなされたのかを把握することが重要である。

本研究では、同じ国出身で、同じ大学の同じ学部に入學した留学生の卒業後の進路がどのように日本での就職とそれ以外に分かれるのか、進路選択の経緯や要因を明らかにすることを旨とする。

II. 先行研究と課題

留学生の進路選択について知ることができる調査として、上掲の日本学生支援機構による「外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果」や「私費外国人留学生生活実態調査」がある。「外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果」では、その年に卒業（修了）した留学生の進路（就職、進学、その他）と先行（日本国内、母国、その他）は知ることができるが、卒業前の状況については知ることができない。「私費外国人留学生生活実態調査」も毎年行われ、アルバイト、学習時間、宿舎等、12の内容の一つとして、「卒業後の進路希望等」の項目があるが、その希望が実現したかどうかの調査はなされていない。株式会社ディスコも毎年、「外国人留学生の就職活動状況に関する調査」を行っている。「現在の日本語力」、「就職したい企業の種類」、「日本企業のイメージ」、「就職したい企業の規模と志望業界」、「就職活動開始時期」、「就職活動量」、「内定状況」、「就職活動の情報源」等、毎年13～16項目を調査しており、就職活動に特化した留学生の意識や行動等を知ることができるが、大学4年生と修士2年生の留學

生が対象調査対象となっていることや、7月頃の内定率のみが示されているため、在学中の進路希望の変遷や最終的に日本で就職しなかった学生の詳細については知ることができない。

これらの調査により、留学生の最終的な進路や在学中の希望、就職活動状況や内定状況は概ね把握できるのだが、希望と実際の進路が一致しているのか、一致しない場合は、どの時点で、なぜ進路変更がなされたのかは知ることができない。

近年、留学生のキャリア教育研究は盛んになっているが、佐藤（2021）で分析されたように、①教育内容、②教育方法、③支援体制、④キャリア形成を支援する人材、に関する研究に集中している。さらに、佐藤（2021）が、今後検討すべき主要な論点の一つとして、就職支援と職場での定着支援、新たな政策形成のためにも、留学生の悩みや本音を発表・発信し、事例を蓄積し、共有していくことが重要だと述べているように、教育や支援を提供する視点や実践から留学生のキャリア教育研究が発展しつつあるものの、肝心の留学生の実態は広く知られていないのである。在学中の留学生の進路選択の経緯がわかる事例も、管見の限り、複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いて元留学生（日本国内で就職した韓国出身の女性1例）を調査した山本（2019）に限られる。まずは、山本（2019）で対象とされなかったような事例（日本国内で就職しなかった事例、韓国出身以外の事例、女性以外の事例）も積み重ねて体系化した上で、共有していく必要があるだろう。

一般的に、大学における就職支援は日本人向けに想定されており、留学生の抱えている事情が分かる教職員は極めて少ない。留学生もその状況を理解していることが多く、就職支援に関して大学に期待しない傾向にある。留学生や就職活動に関連する教職員に限らず、全ての教職員が留学生の進路選択の経緯の事例をいくつか知っておくだけで、時宜を得た支援や実態に即した教育につながる可能性が広がり、留学生を取り巻く状況が大きく改善されると考えられる。

以上のことから、本研究では、留学生の中で最も大きな割合を占める中国出身の留学生（日本学生支援機構2022：4）に焦点を当て、大学在学中の進路希望の変遷、経緯に関する調査を行うこととした。そもそも、発表・発信されている留学生

の進路選択の経緯を示す事例が殆どなく、事例を共有していくことからして留学生教育の課題であるため、本稿ではできる限り多くの事例を示し、その上で、比較、分析を行い、進路選択の背景にある要因を抽出したいと考えた。

Ⅲ. 調査・分析方法

1. 調査概要

2年次（2015年度）に就職活動をテーマにした日本語の授業を履修した中国人留学生を対象に、卒業前（2017年度）に調査協力を依頼したところ、8名（以下、C1～C8）から協力を得ることができた。

卒業の直前に調査を行うことにしたのは、進路が決定しており、尚且つ、在学中の進路選択の経緯を振り返りながら語るのに適した時期だと考えたためである。加えて、卒業後は、帰国や遠方での就職の可能性もある上、新しい環境の中で多忙を極めることも予測される。このような事情から、調査は、2018年1月29日から3月25日までの間でそれぞれの調査協力者が都合のいい日時に、面接法を用いた調査を筆者の研究室にて一人一回ずつ行った。ただし、調査協力者の都合により時間切れとなった場合（C1、C3）は、日を改めて続きを行った。また、留年で卒業が延期になった学生（C4）には、翌年の卒業前に、メールで最終的な進路の確認を行った。

調査協力者は、全員、私費留学生であり、2014年4月に地方公立大学であるJ大学経済学部に入學した。2年次配当の就職活動をテーマにした日本語の授業を全員履修しており、その際、帰国希望の1人（C8）以外の7人（C1、C2、C3、C4、C5、C6、C7）は日本での就職に意欲を示していた。日本語能力は入学当初より全員上級レベルであった。4年次終了間際である調査時の年齢は最年少が24歳、最年長が31歳で、C1～C6は男性、C7・C8は女性であった。

面接では、まず、決定した卒業後の進路について尋ねた上で、2年次の就職活動をテーマにした日本語の授業の履修後からどういう経緯で進路決定に至ったのかを聞いた。加えて、日本で就職活動をした学生には、2年次の日本語の授業が就職活動に役に立ったかどうかについても尋ねたが、

それは別稿に譲る。調査の時間は最短で17分、最長で67分であった。就職活動をしなかった学生は短く、就職活動をした学生はその経験の分、長く語った。録音の許可が得られた7人に関しては、録音し、書き起こしを行い、録音の許可が得られなかった1名に関しては、許可を得た上で、筆者がインタビューのメモをとった。これらの資料を本研究のもととなるデータとした。なお、3章以降のデータの中で現れる「」は調査協力者の語りをそのまま引用したものであり、「」は筆者が補った部分である。

2. 分析概要

今回の調査においては、同じ国出身で、同じ大学の同じ学部にも、同じ時に入学した複数の留学生のデータを得られたという先行研究にはない特徴があり、それぞれのデータの比較が可能である。

そのため、分析にあたっては、先に述べた録音記録および書き起こしの文字化資料をもとに、①大学入学から卒業までの時間軸に現れた進路選択に関わる経験から、調査協力者それぞれのキャリア・ストーリーを作成する、②キャリア・ストーリーの時間軸に沿って確認された個々の経験と選択をもとに、進路選択の経緯に関する比較・分析を行う、③キャリア・ストーリーにおいて進路選択に影響を与えたと推測される要因の抽出を行い、抽出された要因の比較・分析を行う、という三つの手順を踏んだ。

本稿におけるキャリア・ストーリーとは、「個々の人生の節目・転機にまつわる経験と選択の物語」（山本・家根橋 2022：177）である。卒業後の進路選択という多くの「大学生」に共通した経験の意味を理解する上では、進路選択に至るまでに本人がどのような考えに基づき何を選んだのか／選ばなかったのか、また、そこにどのような社会的要因があったのかを明らかにすることが必要である。山本（2018：54）は、「就職にまつわる時間と空間軸を研究対象として個人の主観的な意識形成の過程を明らかにすることで、言語・文化・キャリアを結ぶ留学生のキャリア理論（モデル）構築が可能になる」と述べ、より個に密着したキャリア研究／実践の展開こそ、日本語教育が果たすべき社会的役割であると述べている。また、柏木（2020：170）が指摘するように、ストーリーテリ

ング (storytelling) やナラティブ (語り) といった個人によって語られた物語の記録・分析は、キャリア研究の重要な手法の一つでもある。

以下、まず①に関して、調査協力者 8 名分のキャリア・ストーリーの抜粋を第 4 章に示す。そして、②で行った進路選択の経緯に関する比較・分析の結果を第 5 章に示す。次に、要因に関する比較・分析を行った③の結果を第 6 章に示す。

IV. 留学生の進路選択をめぐるキャリア・ストーリー

2 年次の日本語の授業時には、帰国希望の 1 名 (C8) 以外の 7 名 (C1、C2、C3、C4、C5、C6、C7) が日本での就職に意欲を示していたが、結果として卒業後の進路は、日本での就職が 4 名 (C1、C2、C3、C4) 大学院への進学が 1 名 (C5)、帰国が 3 名 (C6、C7、C8) となっていた。

まずは、断片的ではあるが多少の先行研究があり、日本人学生の進路選択の経緯との類似性が高いと思われる日本で就職した留学生のキャリア・ストーリーから示していく。その後、留年、進学等、すぐには就職しないが日本に残る学生のキャリア・ストーリーを示す。それらの事例を踏まえた上で、最後に、特に実態が明らかになっていない「母国への帰国」という選択をした留学生のキャリア・ストーリーを示していく。

1. 一般的な就職活動によって日本企業に就職した C1 のストーリー

C1 (男子学生) は来日前から、日本で就職したい、日本に永住したいと考えていた。その理由として、中国での就職状況が厳しいことや自身の出身地域が豊かではないことを挙げた。来日後、日本語学校を経て大学に入学したが、大学卒業まで一貫して、日本で就職したいという気持ちは変わらなかった。

C1 が就職活動の話として、語り始めたのは、インターンシップからであった。C1 は内定までに数回のインターンシップに参加する。最初は、商社、貿易、卸売業しか考えていなかったという。特に、商社は「自分が合いそうな」、「自分が勉強していることに関連性がありそう」だと思っていた。実際、C1 が 2 年生の時に日本語の授業の発表で取り上げたのも大手商社であった。3 年生の

夏には、単位認定されるインターンシップに参加したが、そのインターンシップ先は、日本語の授業で発表した商社の中国にある支社であった。C1 は、そこで働く人々が大変優秀で、自分の力が足りないことを思い知ったという。その経験もあってか、C1 は就職活動の対象を広げる。最終的には大手不動産関係に就職したが、不動産関係だけでなく、小売、卸売、流通等の企業に対して就職活動を行っている。三次面接や会長面接まで進んで、不採用通知を受け取ることもあったが、「あまり大事にされていない」、「大変そう」、「出張が多い」、面接官の態度が嫌だった等の理由で、自分から就職活動を辞めたこともあった。

内定後は、主にオンラインで研修が行われ、4 月に東京で入社式が行われた。

2. 一般的な就職活動とは異なる方法で日本企業に就職した C2 のストーリー

C2 (男子学生) は、中国で大学を卒業後、日本に留学した。最初は、日本の大学院への入学を目指したが、日本語学校時代に、文系の場合、大学院卒より大学卒のほうが就職に有利だと気付く、就職に強いと評判の J 大学に入った。C2 は大学入学後、日本人と接する機会が増え、日本に永住したいと考えるようになる。さらに、好きでなくても続けなければならない親戚付き合いや早く結婚しろという親戚からのプレッシャーにより、中国に帰ると面倒だと感じるようになる。その後も、日本で就職したいという気持ちは変わらず、3 年生の時には就職活動を開始する。大手企業を目指すのが苦戦し、「(30 歳過ぎている自分には) 大手は無理だと思った」という。

4 年生の初めには、就職活動と同時に、2 カ所でアルバイトをしている。一つは、隣県にある貿易会社で、卒業後は採用すると言われており、正社員同様、朝から夕方まで働く日もあった。もう一つは観光地でアイスクリームを売る仕事だった。貿易会社での仕事について、C2 は以下のように語る。

みんな朝から『おはようございます』だけ言って仕事、始める。エクセルとかいっぱい使って。その時は、もう私にとって本当につまらなかった。仕事データばかり。あと電話を受けるだけ。従業

員あんまり喋らない。お互い交流しない。私は1日、すげー長いと思った。今日も明日も本当にやる気が出ない。事務の仕事、私、苦手です。その時、気づいて…。私、接客が好き。(中略)アイスクリームを売る仕事、結構お客さんと話す。その時にすごく楽しかった。あー、これが私の本業かなと思った。

(C2 インタビューより抜粋)

それに加え、今住んでいる地域が好きで、この地を離れたくないということをアイスクリーム店の店長に話したところ、店長は「地元の企業を紹介しよう」と言い、携帯電話販売代理店事業等を営む知人にC2を紹介する。C2は1回の面接で内定をもらう。4年生の9月だった。10月に内定式があり、その後、大学在学中はその会社の研修を受け、その会社の携帯電話販売店でアルバイトをし、卒業後、正式に就職することになる。

C2は、大学卒業後について、「順調にいったら(就職した会社に勤め)続けるけど、あまりうまくいかなかったら、自分で起業したいと思う。日本で。人脈を使って。」と語った。具体的には「観光事業」とし、大学時代を過ごしたJ市に中国の内陸部から観光客を呼びたいという。

3. 進学希望から就職に転じ、5年後には帰国したいC3のストーリー

C3(男子学生)は、中国の3年制の大学卒業後、日本の日本語学校で学び、大学に入学した。中国の大学で2年生の時に読んだ本の影響で、「金融の力」を知り、「金融の勉強をして株とか為替とかによって金を儲けよう」と考え、来日した。この頃、C3は、日本企業といえば、残業が多いというイメージをとっても強く持っていたため、日本で就職しようという考えは全くなかった。大学卒業後は日本の大学院に進学して、大学院で勉強しながら、株や為替で儲けようと思っており、大学院卒業後の進路については考えていなかったという。

実際、2年生後半から独自に為替や株の勉強を始めたが、3年生になると、ゼミでの勉強が忙しくなった上、バイト先でもシフトが増えたため、為替や株についての勉強が思うようにできなくなったという。そのような中で、清の時代の偉人

をテーマにしたビデオを見て、「人は早く社会に入って学ぶ方がいい」「ずっと学生のままでとすると、ダメかな」と考えたという。早いうちに社会に出て、社会の中で学んだ方が伸びると思い、進学をやめて、就職することを決意する。

就職先に関して、C3は2年生前半の日本語の授業では、就職するなら金融関係がいいという発言をしていた。しかし、3年生後半の就職活動が始まる前までに、銀行や商社は難しいと判断し、銀行や商社への就職活動もすることはなかった。C3は雑誌やインターネットで多くの情報を集め、自分なりに理解し、自分の進路選択に活用していた。銀行に関しては、地銀は地元の日本人が有利、中国へ進出する気がない銀行に就職活動をしなくても留学生が採用されるはずがない、銀行は多くの時間と労力をかけて銀行員を育てるため、2、3年で帰国するかもしれない留学生を採用する可能性は極めて低いと判断している。商社に関しては、営業職では、留学生は日本人と比べて日本語ができない、そして、人脈がなく新規開拓ができないことを挙げた。その結果、C3は、就職活動の対象を小売業に絞る。その理由について、文系の卒業生の70%が営業職に就くというデータを挙げ、「僕は営業職が一番嫌なので、だから営業じゃないとすると小売業くらいしか考えられないですね」と語った。さらに、日本で働いた後、国に帰って起業したいという希望も述べ、国に帰って銀行や商社を作ることはできないが、小売業でなら起業できそうだと述べた。C3は中国の環境汚染と高齢化を視野に入れ、ドラッグストアを就職活動の対象に定めた。そして、就職活動の地理的範囲を在住する県と隣県2県の計3県に絞った。C3は、卒業論文のテーマもドラッグストアにしていた。雑誌からだけでなく、ネット上の口コミからも情報を集め、ブラック企業、残業時間、ノルマ、退職者数、給料等の情報をチェックしていた。3年生の12月までには、3県にある全てのドラッグストアについての情報を集め、1月頃には就職活動の対象企業の絞り込みを終え、就職活動の準備を進めた。

結局C3は、ドラッグストアを中心に小売業約10社に対して就職活動を行う。不採用の通知を受け取ったこともあるが、その理由について、A社は自分の準備不足、B社は留学生が要らなかつ

ただと分析している。本命のドラッグストアから、内定の書類が届いた時点で他社への就職活動は辞めている。「留学生を必要としない企業だったら絶対行かない。行ったら落ちます」と就職活動を振り返る。

C3の場合、内定後の研修等はなく、会社からの指示もなかったが、自ら登録販売者の資格試験を受け、合格している。

C3の卒業後の計画は、5年くらい働いたら帰国し、起業するというものである。帰国の理由については、次のように語っている。

中国人は中国だったら頑張れば、10年後、20年後、部長とかに副社長とかにも上がれる。でも、中国人は日本で就職する場合、課長を突破できないです。部長とかなんとかあり得ないです。だから、優秀な人は日本で何年か残って、学びたいものとか、人脈とかを手に入れたら帰国します。

(C3インタビューより抜粋)

起業について、具体的なことはまだ考えていないという。

4. 留年後、日本で就職したC4のストーリー

C4(男子学生)は2年生の時には、日本で就職希望であったが、就職活動が始まる頃に帰国した際、親から「帰ってきてほしい」、「そばにいてほしい」と願望を伝えられる。親の意向に対して、C4は「日本に残りたい」と言うが、「よく相談」した結果、「両方(日本に残るのも、中国に帰るのも)ありかな。帰っても楽でいい」と思い、「嫌とは言っていない」と振り返る。この時点ではまだ就職・帰国を決めかねていたC4だったが、その後も親からは「帰ってきてほしい」と言われ続けたことから、C4は卒業後の進路として「帰国」を決意する。C4の実家は自営業で、将来的にはC4が継ぐことを親は期待しているが、今は継ぐためではなく、「ただ帰ってきてほしい」とのことであった。そして、すぐに家業を継ぎはしないものの、親がC4に仕事を斡旋できる宛てはあったという。帰国を決めたため、日本で就職活動をせずに4年生になったC4だが、4年生の12月頃、それまでの進路選択を再度変更し、日本に残ることを決意する。この時も親と「よく相談」したと

いう。C4が日本に残りたい理由は、「日本が好き」、「(日本が)合う」というものであった。それに加え、4年生の10月頃、交際相手と復縁したことが影響したようである。交際相手は同国人で既に日本で就職をしている。将来的に中国に帰るかどうかについては、4年生終盤には「まだ未定」と話した。これから始める就職活動に関しては、友達や交際相手から情報を集めていた。C4が2年生の時に憧れていた企業は「色々情報調べたけれど、外国人を受け入れない」ため視野には入れず、就職活動を行う予定だという。

結局、C4は4年間で卒業要件となる単位数を満たすことができず、1年留年したが、4年目の冬から就職活動をはじめ、5年目には内定を得て卒業し、交際相手の住む隣県に就職したのであった。

5. 日本での就職希望から日本の大学院進学に転じたC5のストーリー

C5(男子学生)には、2年生の時から入社したい大手企業があった。その気持ちは4年生の卒業間際でも変わらなかった。しかし、2年生の時にある経済誌で、就職倍率の高さを目にしたことから、「(自分の能力に)足りないところがある」、「優秀な大学の学生と比べて足りない」と考え、2年生の秋には大学院進学を決意する。その後、C5は日本での就職活動を行わず、大学院進学に向けて入試の準備を行い、首都圏を中心に受験を行った。有名私立大学の大学院に複数合格するものの、最終的に進学先として、首都圏に近い国立大学の大学院を選択する。「最終目的は進学ではなく就職、具体的に言えば、東京で就職したい」と述べ、地方の大学から首都圏に近い大学院に移ることで就職活動にかかる交通費・宿泊費が軽減できるとも語った。

6. 日本での就職希望から母国での就職希望に転じたC6のストーリー

C6は(男子学生)は2年生の時には日本での就職を希望していたが、結局、日本での就職活動はせずに、中国で就職した。中国に帰る方向に気持ちが変わったのは、3年生の後半に、「両親から帰ってきてほしいと言われた」からで、「一人っ子だからもう仕方ない」、「(親の)面倒見なけれ

ばならない」と述べた。卒業のために必要な単位を揃え、卒業論文を早めに仕上げたC6は、4年生後半には生活の拠点を中国に移す。もともとは、実家に用事があった一時的に帰国しただけだったのだが、用事が終わると暇だったため、父親の友人の会社で働き始めたという。ただ、その会社での仕事を「あんまり合っていない」とし、大学卒業後、転職先も探していくつもりだという。

C6は、大学時代を振り返り、中国のビジネスマナーについて知る機会や日系企業ではない中国の会社でインターンシップをする機会もほしかったと語った。

7. 日本での就職活動を途中で辞めたC7のストーリー

C7(女子学生)は、2年生の時には日本での就職を希望しており、3年生後半には実際にプレエントリーや企業説明会への参加といった就職活動もしたが、4年生の4月下旬の説明会参加を最後に、就職活動を辞めた。C7は、この進路決定に関する「一番基礎的な問題」、「一番重要な問題」として、一生日本にいるつもりはなかったこと、日本で何年か仕事の経験を積んだら中国に戻って働こうと思っていたことを挙げた。そして、一生日本にいるつもりだったら、どんな仕事でもとりあえず探しただろうと続けた。また、C7は、進路選択にあたり結婚についても考えていた。一旦、日本で就職したとしても、結婚は母国でしようと考えていたのである。

帰国という選択を最終的に決定づけたのは、最後に参加した説明会で、再会した日本語学校時代の先輩と就職について情報交換し、語り合ったことであった。C7は4年生になってから、中国で働いている友達、家族、親戚などから広く情報を集めており、説明会での先輩との話し合いは、それらの情報を総合的に整理して判断する機会であったと考えられる。特に、C7の母親は、C7の就職や結婚といった将来設計に関して、積極的な関与、支援を行っている。結婚に関しては、「28歳ぐらいで結婚してほしい、30歳まで子供産まないと困る」と具体的な年齢を示してC7に語っている。就職に関しても、C7の母親は中国の学生向け就職説明会の見学にも行っており、自身の職場の知り合いや親戚からも情報を集めている。

そして、会社を経営する兄弟(C7のおじ)に、C7に仕事を紹介してくれるよう頼んでいる。このおじも早く帰国することを勧めたという。C7は帰国の正当性について、「(日本で)3、4年ぐらい働いても経験が役に立たないかもしれない」、「若いうちに帰らないとチャンスがなくなる」、「卒業したばかりの時、帰った方がまだ競争力を持っている」と語った。日本での経験が中国で役に立たず、数年分、年をとってから中国で一からやり直さなければならないのであれば、若いうちに帰った方がいいと考えたのだ。また、「(日本で数年働いてから帰国し、)30歳から最初からやるんではたら上にのぼる可能性が低いです」とも語っており、C7が就職だけではなく、さらにその先の昇進までも睨んでいることが分かる。

帰国後、C7の母親はC7におじの力を借りて就職することを勧めているが、C7自身は、まずは自分の力で、故郷から離れた都市で、就職活動をしようと考えており、就職活動中に滞在させてくれる知り合いの宛てもあるという。就職活動に関しては従兄から、大学卒業前から中国の会社にどんどんEメールで履歴書等を送ってみるように言われ、自身もインターネットで中国の面接試験等について、調べているという。日本に留学したのだから、それを活かして働きたいという思いはあるものの、日系企業に入れるかどうかはわからず、中国企業に入る可能性もあると語られた。さらに、母語と日本語の2カ国語では足りない、少なくとも3カ国語使える必要があるとも述べた。また、「ずっと日本にいますので、(中国が)どういう状態かわかんないんです」と長期間日本にいる留学生特有の困難についても語った。

8. 来日前から帰国希望のC8のストーリー

C8(女子学生)は、来日前から日本での就職を希望しておらず、日本の大学を卒業することを目的に来日し、最初から就職は中国でする予定だったという。

しかし、J大学に入学後、1、2年の時に、自分の周囲の中国人留学生が全て日本での就職希望だと知り、初めて日本で就職するという選択肢が自分にもあることを意識したという。少し悩んだC8ではあるが、「でも、すぐ決めたんですよ、帰るって」と続けた。その理由を「日本の就職の雰

雰囲気とか多分・・・自分には合わないと思って」と語った。それを強く感じたのは3年生から続けたアルバイト先での経験だという。卒業のための単位も概ね満たしていたため、正社員のように、一日中、働く日もあり、その中でいろいろ学び、雰囲気もよく分かったという。C8は、アルバイト先の雰囲気を「ちょっと嫌だ」、「重すぎ」、「胸が苦しくなる」と語った。具体的な理由として、話もせずずっと作業し続けることや、女性が未だお茶汲みをする慣習が残っていることを挙げ、そこでの経験により、「決心した」という。

帰国後の就職活動に関しては、方法は「よくわからない」としたものの、「とりあえずネットで調べる」、「自分で探す」と語った。一方で、親がC8の母国での仕事探しや結婚相手探しに積極的であることも語られた。帰国後の職業選択に関しては、どんな仕事が合うかまだわからないと語ったものの、第一希望は商社、第二希望は物流とし、「何年も日本語を勉強したから」、「もったいない

から」という理由で、日本語を使う仕事をしたいとし、日系企業を視野に入れた就職活動をしたと語った。

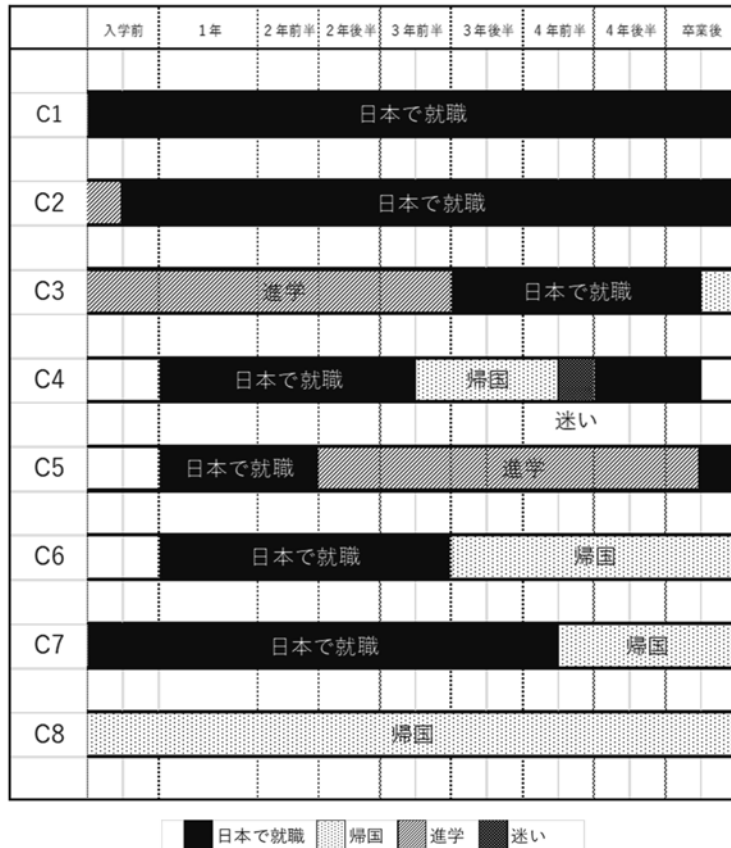
V. 進路選択の経緯の比較・分析

ここでは、キャリア・ストーリーの時間軸に沿って確認された個々の経験と選択をもとに、進路選択の経緯に関する比較・分析を行う。進路変更がなされた時期を可視化し、8人の進路希望の変遷を比較しやすくするために、表1を作成した。入学前から卒業後までの時間軸を左から右へとり、「日本での就職希望の時期」、「帰国希望の時期」、「進学希望の時期」、「迷っている時期」に分けて示した。

1. 来日前の意志

大学入学前のことを語った留学生と特に語らなかった留学生が存在することが、表1からもわか

表1 進路選択の経緯



る。語った留学生は、それを進路選択の上で重要な要因だと位置づけていると考えられる。入学前のことを語ったのは、C1、C2、C3、C7、C8であった。

その中でも、日本での永住を意識して来日したC1、帰国を想定して来日したC8は、卒業に至るまで進路の変更はなかった。大学院で学んだ後は日本で就職しようと考えて来日したC2も、大学院には進学しなかったものの、日本で就職という来日前の希望を実現している。C7は、大学入学以前から、大学卒業後は日本での就職希望だったが、何年か働いたら帰国するという条件付きでの希望であった。つまり、永住する場所は中国だと決めていたため、「日本での就職」から「帰国」への進路変更が比較的容易になされたと考えられる。

これらの事例から、来日前、入学前から「日本での就職」または「帰国」というはっきりした将来のビジョンがある場合、それが実際の進路選択に反映される可能性が高いことが示唆できる。

また、C2、C3に関して言えば、どちらも大学院への進学希望をもって来日したことを語っているが、双方とも進路変更し、大学卒業後は日本で就職している。C2は、大学院への進学を希望してはいたが、最終的には日本での就職を目指して来日していた。C3は学生のままでいるより、早く社会に出て学んだほうが良いと思い、3年次半ばに進路を「日本での就職希望」に変更している。進学という進路選択は、「日本での就職」か「帰国」といった進路の最終決定の通過点に過ぎないため、「日本での就職」に挑戦できると自分で考える段階までの準備が早めに整えば、進学希望から就職希望へ容易に変更が起こりうると考えられる。逆に、準備が整わなければ進路決定を延期する手段ともなり得ることは、自分の力不足を感じ、「日本での就職希望」から大学院進学に進路を転じたC5の事例からも窺える。

2. 進路変更の時期

C1は「日本での就職」、C8は「帰国」と来日前から卒業まで希望する進路は一貫していたが、他の6人は進路変更を行っている。

C3は、3年次半ばに進学希望から就職希望に変更して、就職活動を行い、日本で就職する。

C5は2年次半ばに就職希望から進学希望に変更し、大学在学中は就職活動を行わない。C4は3年次前半、C6は3年次半ばで帰国を決め、日本での就職活動をしなかった。留年と2度の進路変更をしたC4を除いてはそれが最終決定となっている。進路変更は2年次半ばから3年次半ばにかけてなされており、就職活動が本格化する3年時後半までに、就職活動を行うか行わないかの決定がなされていることがわかる。先行研究では、日本で就職を希望する学生に比べて、実際に日本で就職した学生が少ないことが指摘され、日本での就職活動に失敗する留学生の姿が推測されがちだが、今回の調査により、就職活動に参加せずに、「日本での就職希望」から「帰国希望」へと進路変更する学生が存在することが分かった。

今回の調査においては、実際に就職活動を経験し、思うようにいかない中で、4年生の4月下旬に進路変更を行ったのは、C7のみであった。

3. 卒業前の留学生の実態

就職活動終了後から卒業までの留学生の実態については先行研究でも明らかにされていなかったが、今回の調査で、卒業前の留学生の以下のような実態が明らかになった。

日本で内定を得たC1、C2、C3のうち、C1、C2は4年生後半に就職予定の企業の研修を受けていた。C3の就職予定の企業では研修はなかったが、C3は自発的に就職後に必要となる資格取得の勉強をしており、3人とも卒業後の仕事のための準備を行っていた。

一方、帰国を決意したC7、C8は、母国の親族・友人、インターネットから中国での就職に関する情報を集めようとしていたが、帰国直前の段階においても中国での就職活動について十分な情報を得ていなかった。帰国を決意した留学生の中で、C6は4年生後半には既に生活の拠点を中国に移し、親の斡旋した職場で働き始めていた。日本人学生の中にも4年生後半を実家に戻って過ごす学生はいるが、今回の調査により、留学生には、4年生後半を母国で働きながら過ごす学生もいることがわかった。中国で働いていたC6からは、中国の社会人としてのマナー等を知っておきたかった、中国企業でインターンシップをしたかったという希望が語られた。C6、C7、C8の事例から、

日本語学校、大学、合わせて6、7年母国を離れ、母国の事情が分からない留学生が存在することが明らかになった。

VI. 進路選択に影響を及ぼした要因の比較・分析

進路選択に影響を及ぼしたと考えられる要因を「日本での就職を後押しする要因」、「帰国を促す要因」、「進学を促す要因」に分けて抽出し、カテゴリー別にまとめたものを表2に示した。

1. 個人の将来的展望

(1) 永住

日本に永住するというビジョンを持った学生(C1、C2)は、日本での就職を実現する可能性が高いと考えられる。このことは、日本での就職活動を途中で辞めてしまったC7の「一生日本にいるつもりだったら、どんな仕事でもとりあえず探しただろう」という語りからも裏付けられる。特に、来日前から一貫して日本永住のビジョンを描き続けていたC1は、日本人学生と同様の就職活動を行っており、就職活動に出遅れる、インターンシップを軽視するといった留学生にありがちな傾向は全く見られなかった。一方で、「卒業後は帰国する」と決めて来日した学生(C8)の意志も変わることはなかった。

(2) 結婚

日本で就職した4人(C1、C2、C3、C4)は全て男性であり、女性2人(C7、C8)は全て帰国している。女性のC7、C8は、帰国という進路選択の要因の一つとして、親が早く結婚するように言うことを挙げる。一方、男性のC3は、母国の親族から早く結婚するように言われるのを嫌い、親族から距離を置くことを日本に就職する要因の一つとしている。今回の調査では、身内からの「結婚」に対する圧力は、結婚に比較的前向きな女性(C7、C8)には帰国を後押しする力として働き、結婚に消極的な男性(C3)には日本での就職を後押しする力となっている。

多くの学部留学生は、日本語学校に2年程度在籍してから大学に入学するため、日本人の同級生より、その分、年上であることが多い。それに加えて、中国においては、地域差はあるものの初婚平均年齢は日本より低い。これらの理由から、留学生の進路選択では結婚という要因が影響を与えやすいと考えられる。

(3) 昇進

C3は日本で就職することが決定したが、5年ほど経ったら帰国し、起業しようと考えている。C7は帰国することになったが、もともとは日本で数年働いて帰国しようと考えていた。二人に共通する帰国しようとする要因が昇進である。C3は、日本社会では外国人の昇進が難しいこと

表2 進路選択に影響を及ぼした要因

(日本での就職を促す要因○、帰国を促す要因●、進学を促す要因*)

大カテゴリー	個人の展望			他者の影響			偶発的要因	
	永住	結婚	昇進	親族	友人・知人	就業体験	メディア	人間関係
C1	○					○		
C2	○	○		○	○	○		○
C3			●				○	
C4				●	○			○
C5							*	
C6				●		●		
C7	●	●		●	●			●
C8	●	●	●	●	○	●		

を帰国の要因として挙げ、C7は日本での数年の経験が中国で評価されず、中国で30歳からゼロから積み上げることになれば昇進の可能性が低いと考えた。C3は男性、C7は女性、C3は日本での昇進の可能性、C7は中国での昇進の可能性を意識しての発言であるが、いずれも昇進の可能性が進路選択の一つの要因となっている。株式会社ディスコ（2019：4）では、課長以上の管理職を志望する外国人留学生は約7割に上り、「国内学生」と比べても高いことが指摘されているが、昇進の希望が強い故に帰国を選択する留学生の存在も今回の調査から窺える。

2. 他者の影響

(1) 親族

親をはじめとする親族についてはC2、C4、C6、C7、C8が語っている。C2にとって親族は煩わしく、帰国を避け、日本での就職へと向かわせる存在であった。一方で、C4、C6、C7、C8にとって、親族は帰国を促す存在であり、自分の子どもを母国で就職させるための人脈を持っていた。特に、親族が就職につながる人脈を母国に持っている場合は、帰国へと向かわせる強い要因となるようだ。

(2) 友人・知人

友人についてはC2、C4、C7、C8が語っている。C2は日本人との交流の中で日本永住を希望するようになった。そして、アルバイト先の店長が、C2に日本での就職の機会を与えた人物となった。C4にとって同国人の交際相手や友人は、日本での就職活動の情報をくれる、日本での就職へと向かわせる存在であった。C7にとって、偶然再会した同国人の先輩や母国で就職活動を支援してくれる知人は、中国での就職へと向かわせる存在であった。C8にとって、同じ大学の留学生達は、日本での就職という進路もあることに気付かせる存在であったが、来日前から卒業後の帰国を想定していたC8にとっては、進路変更するほどの力を持つ要因とはならなかった。

(3) 就労体験

C1はインターンシップで自分の実力を把握し直した上で、範囲を広げ、就職活動に臨んでいる。

C3は事務系のアルバイトを通して自分には接客業が向いていると気付く。これらの経験が日本での就職活動の成功に役立ったと考えられる。来日前から帰国希望だったC8にとって、アルバイトの経験は、日本の職場に向いていないと思い、帰国の意志を固める機会となっている。4年生後半に中国で働き始めたC6も今の仕事は自分に向いていないと語っているが、日本での就職へとは向かわない。

就労体験は、留学生の進路決定を微調整、再確認するような効果を持っていると考えられる。

3. 偶発的要因

様々な要因を取り込み、時間軸に沿って進路決定に向かう流れの中でのことではあるが、最終的な進路決定に影響を与えている要因には、偉人の伝記のビデオ（C3）、経済誌（C5）、恋人との復縁（C4）、旧友との再会（C7）といった偶発的なものが多い。今回、抽出できたのは、偶然目にしたメディア情報（C3、C5）と人間関係（C4、C7）に関するものであった。偶発的要因は、個人のライフキャリアにおいて避けられないものである。留学生の場合、日本での就職活動をするかどうか、続けるかどうかという点が進路変更のポイントになるが、ここでも偶発的要因が多く留学生に大きな影響を与えていることがわかる。

VII. まとめ

学部留学生の進路選択の事例を挙げた先行研究が極めて少ない中で、本稿においては、中国出身で、同じ大学の同じ学部に、同じ時期に入学したにもかかわらず、就職、進学、帰国と進路が分かれる8名の事例を収集し、分析することができた。

そして、調査・分析の結果からは、定住・結婚といったライフイベントを見据えた個々の将来展望に加え、親族・知人・友人といった他者からの影響や日本での就労経験、更には、在学中に経験する本人も想定していない様々な偶発的要因が関与していることが示唆された。中でも、入学以前からの「永住」、「帰国」といった将来の希望の有無や希望の強さが就職活動や進路決定に影響を及ぼした事例、家族・親族の意向や人脈などの社会的要素が進路選択に大きく関わった事例等が示さ

れた。

そして、これまでの研究では取り上げられることが殆どなかった「日本での就職希望」から帰国や進学に進路を転じた事例も複数収集し、分析することができた。従来、このような経緯をたどる留学生は日本での就職活動に失敗したものと推測され、教育や支援の内容の検討がなされてきたが、実際には、そのような留学生ばかりではなく、就職活動に参加することなく、3年次半ばまでに進路変更をしている留学生が少なからずいることが示唆された。加えて、日本での長期留学生活によって、母国での就職活動情報の収集に困難を感じているといった先行研究では触れられることのなかった帰国前の留学生の実態についても知ることができた。

大学での留学生の就職支援、キャリア支援では、まず、留学生の進路選択の経緯を広く教職員が知ることが大事である。本稿では、大学の教職員が留学生支援に活用しやすいように入学から卒業までの時間軸に沿った整理も行った。また、本稿で示すことができたのは、学部留学生で最も大きな割合を占める中国人留学生の事例、しかも、就職、進学、帰国の事例が一通り揃っており、これらの事例を把握していれば、突然、留学生から相談を受けた場合でも、的を射た助言や支援がある程度可能になると考えられる。

さらに、今後、大学においては、日本で就職しようとする留学生への支援だけでなく、帰国する留学生の就職支援もできるようになるとよいだろう。具体的には、母国でのインターンシップ、就職活動、求人に関するような情報提供である。帰国後、日本での留学経験を生かしたいと考える留学生と企業とのマッチングが広く実現可能となれば、留学生と企業の双方に有益だろう。大学と企業が連携して、これらの事業を展開できるとよい。また、日本で外国人は出世できないから数年で帰国すると話した留学生(C3)もいたが、このような不平等な取り扱いを受ける事例が本当にあるならば、大学からも企業に留学生や元留学生を平等に扱うよう働きかけていくべきであり、これが誤解であるならば、企業に関する正しい情報を留学生に伝えていくことも重要だろう。

政府は留学生の就職率を引き上げること考えているが、留学生を単に労働力不足を補う人材と

して位置づけてはならない。日本に永住したいと思ひ、日本での就職を決めた元留学生達が、いつまでもその気持ちを持ち続けられるような環境を政府も企業も大学も個々人もつくっていかねばならない。

謝辞：調査協力者の皆様に心から感謝の意を表します。

引用文献

- 柏木仁 (2020) 『キャリア論研究 (補訂版)』 文眞堂。
- 株式会社ディスコ (2019) 「外国人留学生の就職活動状況 (2020年度調査結果)」 https://www.disc.co.jp/wp/wp-content/uploads/2019/08/kaigairyugakuseichosa_201907.pdf (2022年4月12日閲覧)
- 佐藤幸代 (2021) 「留学生のキャリア形成支援・就職支援をめぐる研究の動向と主要論点」 『名古屋高等教育研究』 第21号、pp.227-246。
- 重田美咲 (2021) 「「就職活動の日本語」コースデザイン—学部留学生2年生を中心に—」 『下関市立大学論集』 第64巻第3号 pp.33-38。
- 日本学生支援機構 (2019) 「平成29年度 私費外国人留学生生活実態調査」 https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2020/10/seikatsu2017.pdf (2022年4月12日閲覧)
- 日本学生支援機構 (2021a) 「2019 (令和元) 年度外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果」 https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_d/index.html (2022年4月12日閲覧)
- 日本学生支援機構 (2021b) 「令和元年度 私費外国人留学生生活実態調査」 https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/06/seikatsu2019.pdf (2022年4月12日閲覧)
- 日本学生支援機構 (2022) 「2021 (令和3) 年度外国人留学生在籍状況調査結果」 https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2022/03/date2021z.pdf (2022年9月27日閲覧)
- 日本経済再生本部 (2016) 「日本再興戦略改定2016—第4次産業革命に向けて—」 https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/2016_zentaihombun.pdf (2022年4月12日閲覧)
- 対日直接投資推進会議決定 (2016) 「グローバルハ

ブを目指した対日直接投資促進のための政策パッケージ」http://www.invest-japan.go.jp/committee/council_05/haihu_04.pdf (2022年4月12日閲覧)

山本晋也 (2018) 「言語・文化・キャリアの教育を巡る日本語教育の展望と課題」『早稲田日本語教育学』第25号、pp.41-60。

山本晋也 (2020) 「留学生のキャリア形成プロセスとは何か —TEM 及び TLMG による可視化を通じて」『早稲田日本語教育学』第27号、pp.297-302。

山本晋也・家根橋伸子 (2022) 「散住地域に暮らす外国人住民のライフキャリア意識とことばの支援の課題」『言語教育文化研究会第8回年次大会予稿集』pp.176-181。

